

古くて新しい問題

——理論社会学の今日的諸問題（2）——

中野 秀一郎

Niklas Luhmann

WeberとDurkheim、それにParsonsの学問的伝統をきわめて正統に受け継ぎ、さらにこれらを越えて〈社会システム論〉の理論家として現在〈先頭集団〉を走っている一人であるNiklas Luhmannの理論的関心を次に鳥瞰することにしたいと思います。

LuhmannはParsonsがそのlifeworkを未完成のままで残していったと考えています(Niklas Luhmann, *The Differentiation of Society*, Columbia University Press, 1982, p.47)。それに、Parsonsがactionの分析から出発したという点に関して、この分析そのものもactionなのかどうか、などと鋭い質問を発しています。しかし、それにしても、かれはParsonsが社会学理論を一定のレベルにまで引き上げたこと、すなわちstructure vs. process, material factors vs. ideal factors, individuals vs. collectivities, action vs. systemなどの二元的対立を統合しようとしたことを高く評価して、今やなにびともこのレベルから後退することはできないのだと申しております(*op. cit.*, pp.58-59)。そして、その方向、つまりParsonsの遺産を受け継いでそれをさらに発展させようという方向で努力を傾けているのです。Luhmannの社会システム論がThe problem of 〈self-reference〉やthe problem of 〈complexity〉の発想を導入してこれを洗練しようとしている点についてはここでは触れる余裕がありません。Parsonsの〈interpenetration〉や〈media of exchange〉の概念(それらは共にシステムの〈分化〉の後でもう一度これを〈統合〉する役割をもつものですが——)にも注意が払われているようです。

Luhmannは最近の自分の研究が二つの領域、すなわち1)社会システムの一般理論の展開と、2)現代社会(modern society)の理論の構築に向っていると告白していますが(*op. cit.*, xii)、その際、歴史的に拘束された社会類型(ex. capitalist vs. socialist society)を離れて、より分析的・抽象的な概念化の重要性(ex. social differentiation)を強調しています。そうして、も

ちろん、こうした関心は必然的に〈統合〉原理の探求へとかれを向わせると想像できるのです。

Luhmannの社会学的関心領域は、こうして、きわめて広く且varietyに豊んだものでありますが、その理論的関心の中核はシステムと下位システム(全体と個)、すなわち、われわれのタームでいえばElementalism vs. Holismを中心に展開する諸問題にあると思われる。これは、Parsonsの正統なる嫡子であるLuhmannの場合、それぞれ自立的な(auto-poiesis)社会システムと人格システムの〈相互浸透〉(interpenetration)の問題として展開することはいうまでもありません。そして、その特徴は、最近かれが『社会学研究』第46号(東北社会学研究会, 1983年)へ寄稿した論文「個人と社会」(同, 97-114頁)でも強調しているように、〈個々の人間〉を〈個人〉や〈主体〉として表現しているうすづばらで独善的なヒューマニズムを打破するという姿勢でありましょう。多分、ここには近代の個人主義的・自由主義的なイデオロギーに対する挑戦が垣間みられるように思うのです。

かれは、人格システムを自己準拠、すなわち〈基準のない根本的な事態〉(生命や意識がもつばら自己によって連続するもの)として捉え、意識の意識それ自身における封鎖的再生産を重視して、これをautopoiesis systemの一種(社会システムもまたそうではありますが)と規定します。かくして、それは厳然として社会の環境を構成することになるわけであり、それでは、社会の環境を構成する個人と、個人の環境を構成する社会は、どのような関係に関わり合うことになるのでしょうか。Luhmannはこの難問に対する〈質の高い解答〉が20世紀初頭に活躍した社会学者達の世代にみることができると一応の評価を与えながら(同, 102頁)、にも拘らずこれらの理論が次の二つの前提にもとづいて構成されていたと批判しております。すなわち、そこでは(1)個人が扱われていたのではなく、イデオロギーとしてあらかじめ用意されている個人主義が扱われており、(2)研究の論理が倒錯的、すなわちある理想を必要としている事態を理想そのものから推論している、というのであります。しかし、LuhmannはDurkheimの社会分化の概念を買っ

ているようにみえます。1977年に初めてドイツ語に翻訳されることになる Durkheim の *De la division du travail social* に寄せた序文の中で、Luhmann はデュルケム理論がそれまでの社会理論に共通の〈社会関係〉に関わる稀少性 (zero-sum) の仮定を破棄して、〈positive-sum〉という考え方を導入したことを高く評価しています。

One of the most impressive aspects of Durkheim's theory is the possibility it offers for exploring conventional assumptions about scarcity, or "zero sums," and for depicting positive-sum relations. Its dominant interest, probably the fundamental motivation for the theory itself, is the desire to conceive the relation between the individual and society in a way that leaves open the possibility of a simultaneous enhancement of both realities. The individuation of the person does not necessarily occur at the cost of social solidarity or vice versa; rather, both incremental processes encourage one another and both are possible only on the basis of a specific social structure (i. e., the division of labor) that in turn is rendered possible through them. Later on, Parsons will speak of "combinatorial gains" and will inquire into the evolutionary accomplishments that make such gains possible. (op. cit., pp.12-13)

実は、こうした発想が社会システムと人格システムの相互作用の中にも摂り入れられて、かれのいう〈相互強化〉の関係(もちろん、その促進・阻害条件の究明が大きな宿題として残るわけではありますが——)が示唆されることになるのです。

その具体的な連関方式はまだ不明確ですが、確かなことは、これら双方のシステム(社会システムと人格システム)は、相互に他に還元できない存在(Einheit)であって、〈その連動した進化によって成立している〉といえるというのです。

確かに、Luhmann は自らもそう申しておりますように、社会システム論の洗練・展開と現代社会の分析を中心課題としてその社会学的営為を進めておりますので、かれが単に〈個人と社会〉の問題にのみ中心的関心を示しているというのはかれの守備範囲を狭く限定し過ぎているというお叱りを受けることになるかも知れません。けれども、現実の社会変動を〈分化〉とみる Luhmann の視角からいえば、当然(そして、その意味ではいささか Durkheim の問題意識に重なってくると思われるのですが)、そうして分化した諸〈単位〉を〈統合〉するという課題がことのほか重要になってくるのであります。(コミュニケーション過程に対するかれの

並々ならぬ関心も実はこの点に大いに関係があるので)敢えて、かれの中心的な理論的関心の所在をここに求めたのはこうした理由によるのであって、この点に関しては読者諸兄の御教示をお願いしたいと思うのです。

Walter Wallace

最後に、Walter Wallace の理論的関心をとりあげておくことにしたいと思います。さて、かれが、近著(Walter Wallace, *Principles of Scientific Sociology*, Aldine, 1983) の中で行なった社会学理論の〈大整理〉は、もちろん、Wallace が60年代からもち続け、探求し続けてきた問題意識の総決算であったといってもよろしいかと思えます。それは多元化現象(pluralism)として理解されている諸社会学理論(の型)を通底する〈基本原則〉(principles)を明らかにしようとしたものでありますが、言葉を換えて申しますと、社会学(かれは、これに scientific という形容詞を冠せました)という discipline (の性格)を確定することでありまして、それはそのままその研究(対象)と〈方法〉の確定によって社会学そのものを確定しようと意図する私の〈原論〉における原関心と軌を一にするものであることは申すまでもありません。そして、このような作業を通して、結局は(その内容に関して以下に若干説明をすることになろうかと思いますが)、私の主張しております Idealism vs. Materialism と Elementalism vs. Holism の統合(synthesis)を試みているとみなすことが可能なのであります。

Wallace は、きわめて素直で卒直なひとであります。〈scientific〉という形容詞を前面に押し出すことで、Alexander など多くの論者がいわば negative にこだわり続ける Positivism の立場を躊躇なく選択するのです。もちろん、だからといってかれが〈主観〉や〈意味〉の世界を軽視したり無視したりするという意味では決してありません。反対に、かれはそれらの世界をも含めて社会現象を一元的に扱おうる paradigm を構築し提唱するわけでありまして。ただ、検討の結果、明らかになるように、社会現象を説明しようと思われる〈変数〉は複数でありますし、当然それらは相互にさまざまな〈関係〉をもちえます。したがって、結局、最終モデルは〈many-variable causal model〉となるのは必至ではあるのですが——。

さて、Wallace は至上の卒直さをもって、〈社会学は自然科学の一つである〉と明言いたします。しかし、Alexander と同様、その基本原則を探求するわけで、これは Jeff の場合は〈theoretical logic〉と呼ばれたもの

ですが、Wallace の場合は *(a generalized disciplinary consensus (≡ a mathesis universalis))* ということになるのでしょうか。そして、いうまでもなく、そのことの具体的な表現は社会学の content と form の description であるというわけです。さらにいえば、それは社会学の対象の確定（これを、かれは a generic definition of social phenomena を提唱するという形で行ないます）と方法の確定（これを、かれは explanatory variables の確立とその組み合わせによる explanatory model の提唱という形で行ないます）であるといい直してもよろしいかと思うわけです。

社会学が〈自然科学〉の一つ（すなわち、哲学や史学や宗教学に似ているよりは、むしろ生物学、化学、物理学などにより似かよっているという主張）であるという意味は、基本的にはその研究対象（substance）が〈empirical referents〉であるということであろうかと思われまが（*op. cit.*, p.6）、そうした立場から、Wallace は社会学の研究対象を〈an interorganism behavior regularity〉であるとし（*op. cit.*, p.14）、（もちろん、その意味では本来の社会学は人間という特定の種のみを扱うものではないとまで明言するのであります）、次のように述べています。

Accordingly, let us define a social phenomenon as an *interorganism behavior regularity*—that is, a regular coincidence of two or more organisms' behaviors—and let us propose this as a generic definition, applicable not only to sociology but to all the social sciences. The definition means that a social phenomenon may be said to exist if, and only if, at least one behavior of a given organism is observed to be regularly accompanied in time and/or space by at least one behavior of at least one other organism. (*op. cit.*, pp.14-15)

First, by referring merely to "organisms," the definition includes nonhumans (including micro as well as macro animals and plants), as well as humans. It therefore registers the fact that the way has always been more or less open to treating biological species as a variable rather than a constant in sociology, and thus open to a general, cross-species comparative sociology that would be the conceptual peer of comparative psychology, comparative physiology, comparative anatomy, and genetics. Present-day sociology, therefore, should be regarded as a subfield of that future, more encompassing, comparative sociology inasmuch as sociology now concentrates almost

entirely on social phenomena among only one species of animal. (*op. cit.*, p.20)

この社会学の研究対象たる〈an interorganism behavior regularity〉は次の四つの構成要素、すなわち、social structure, cultural structure, spatial regularity, それに temporal regularity に分割されます。同様に、説明変数についても、行動主体である特定の個体に準拠して、その〈内なるもの〉(internal) とその〈外なるもの〉(external) ——後者はさらに people と things に分けられ、things はまた living と nonliving に分けられますが——とに二分され、個体と people が body と mind とに再分割されるという具合になります。その内容に詳しく立ち入ることは不可能でありますから、ここではわれわれの関心に引き寄せて Wallace の考え方をみておくことにいたします。

〈個と全体〉の問題は、Wallace の場合、どちらかといえば第二次的なものであると申せましょう。というのも、かれの場合、社会現象は決して単一個体状況では起りえないものでありまして、むしろ定義によって、それは複数の個体を包摂しているからであります。個体は相互の関係において、一定の〈意味〉を相互にもち合うわけですが（ex. same vs. different, equal vs. unequal, compatible vs. incompatible など）、その組み合わせに応じて unison, imitation, cooperation, administration, competition, dominance, conflict, oppression などの関係形態をとるわけであります。そうしたわけで、ここでは、個体は〈一定の内なる説明変数を抱え込んでいる〉行動の主体として想定されていると申してもよろしいかと存じます。

それでは〈物質と観念〉の問題はどうでしょうか。ここでも Wallace の立場は明快であります。有機体の存在と行動を body と mind, physical と psychical に分けてしまうからです。そこから、social structure (body-physical) と cultural structure (mind-psychical) とが構成されてくることは見易い事実であります。こうした発想を基礎に、Wallace は10個の説明変数を異にする理論モデルの型を抽出するのでありますが、その類型と内容に関するコメントをかれ自身の言葉でみておきましょう。

"Materialism" emphasizes the explanatory power of those aspects of individual B's body which the analyst regards as innate (more precisely, genetically inherited) and as behaviorally consequential—including the gene itself, and, for all humans, anatomical features like large brain binocular vision, primary and secondary sex characteristics, opposable thumbs, upright stature, and

Typology of sociological explanatory variables.

Locus of constraint on individual B's behavior	origin of constraint on individual B's behavior	
	Existentially given	Socially influenced
Internal: in individual B's own		
Body	Materialism	Nurturism
Mind	Instinctivism	Enculturism
External: in individual B's environing		
People's bodies	Demographism	Social structuralism
People's minds	Psychical contagionism	Cultural structuralism
Living things } Nonliving things }	Ecologism	Technologism

(*op. cit.*, p.194)

physiological features like aging, motility, and recurrent needs for oxygen, water, and food.

"Nurturism" emphasizes those aspects of individual B's body which the analyst regards as consequences of social influence—including the features mentioned under materialism as modified by the experience of, let us say, socially induced diet and fasting, exercise and sloth, and surgical modifications including amputations, grafts, bypasses, and transplants.

"Instinctivism" emphasizes those aspects of individual B's mind which the analyst regards as innate, for example, linguistic "deep structure," intelligence and creativity falling within the distinctively human range, a similarly human capacity to experience certain emotions, and also whatever psychical drives or instincts may be regarded as innate.

"Enculturism" emphasizes those aspects of individual B's mind which are regarded by the analyst as consequences of social influence, for example, learned norms and values, language and other gestures, tastes, beliefs, hopes, fears, self, and conscience.

"Demographism" emphasizes those aspects of the bodies of people in individual B's environment which the analyst regards as existentially given, and includes the absolute number of such bodies and the distribution among them of features mentioned above in connection with materialism—especially age, sex, mortality, and physical mobility.

"Social structuralism" (including unison, ex-

change, conflict, and functionalist varieties) emphasizes socially influenced aspects of the physical behavior of people in B's environment—especially their role-performances (as discussed in Chapter 3) and including aspects mentioned above in connection with nurturism.

"Psychical contagionism" emphasizes those aspects of the minds of people in individual B's environment which the analyst regards as existentially given—including the absolute number of such minds and the distribution among them of features alluded to above in connection with instinctivism, such as fear and dread, love and hope, excitement, attention, awe.

"Cultural structuralism" (including consensus, complementarity, dissensus, and symbolic interactionist varieties) stresses socially influenced aspects of the psychical behavior of people in individual B's environment—especially the role-expectations (discussed in Chapter 4), and including aspects mentioned above in connection with enculturism.

"Ecologism" emphasizes those aspects of things (both living and nonliving) in individual B's environment which the analyst regards as existentially given, including sunlight, gravity, the motions of the moon and planets, the rotation of the Earth, climate, seasons, oceans, mountains, deserts, and also trees, viruses, bacilli, plankton, trout, termites, and tigers.

Finally, "technologism" emphasizes those aspects of things (again, both living and nonliving) in individual B's environment which the

analyst regards as having been socially influenced, for example, houses, chairs, plows and axes, paper, computers, clothing, heart-lung machines, safety pins, guns, medicines, and also dairy cows, wheat, cotton, potatoes, thoroughbred horses, and microorganisms (like penicillin) whose growth patterns have been artificially modified. Clearly, both ecologism and technologism are divisible into types emphasizing aspects of living things, and aspects of nonliving things, respectively — thereby yielding a total of twelve types of explanatory variables.

(*op. cit.*, pp.194-195)

もちろん、その一つ一つは、またいくつかのサブカテゴリーに分類することが可能となるわけです。しかし、分類を示し、いくつかの過去の社会学理論がそのどれかに対応するのだと示唆しただけでは〈統合的な理論枠組〉の構築という作業を終えたことには決してなりません。早い話が、例えば、それでは social structure と cultural structure は相互にどのような関係にあるのか、というような問題は、単に前者が body をベースにした physical behavior の regularity を、後者が mind をベースにした psychical behavior の regularity を、表わしているのだと試してみても解決したことにはならないでしょう。この点に関する Wallace の答えは、結局、many-variable causal model の作成を通して得られるということになるわけです。すなわち、こうした場合、この二つ(社会と文化)を *a priori* に結びつけている〈関係〉の構造などというものは存在しない、ということです。説明さるべき当該社会現象 (the social phenomenon of interest) との関係が多様な (もちろん、それは Wallace によって遺漏なく数えあげられているはずのものです) 変数が多様な関係を構成することになります。こうした具体的な手続きの中で、一定の関係が確立できるというわけでしょう。そういうわけで、かれは同一レベルの因果関係について enumerative, sequential, interactive の三つの類型 (もちろん、その各々がまたいくつかのサブカテゴリーを含むわけですが) を示すというような形式的議論を展開するに留まります。それから、もう一つ、Wallace がこの大著の中で明確にしようとしていることがあります。それは、いわゆる pure science と applied science を区別し定式化しておくという作業であります。もちろん、この主題は直接われわれの現在の関心に関わるものではありませんから、ここでは単にその事実を述べておくだけに留めたいと思います。

考察と暫定的結語

さて、以上、四人の社会学者がそれぞれの仕方でも理論社会学の現状に飽き足らず (いくにんかの人がとはこれを〈crisis〉とまで呼んでいるのですが——)、より一般的でより統合的な社会学の〈理論枠組〉を提唱しようとする際の〈関心〉についての検討を行ってきたわけですが、それが私自身が早くから主張している〈社会の概念化〉における Idealism vs. Materialism と Elementalism vs. Holism (Individualism vs. Collectivism) という二つの dichotomy と相変らず密接に関係していることをもう一度確認することになったと申しあげてよろうかと思えます。もちろん、これはもっとも〈一般的な〉レベルの理論的関心であって、より具体的なモデル類型のレベルでは、よりさまざまな関心が存在することはいうまでもありません。こうして、この essay の始めて私が示唆したいくつかのモデルをめぐる dichotomy はそれぞれの論者がそれなりに関心を示すことになるわけがあります。ただ、私自身の〈概念化〉における諸関心、例えば、〈層化〉(深さ、あるいは可視性対不可視性)や〈制度化〉や〈機能的統合〉の問題は、直接的な形では、今回検討した論者の議論には表われていません。だから、こうした点については、より具体的な社会学理論構築のレベルで、機会を改めて論じてみたいと考えております。そこで、以下では、この essay のまとめとして、上に検討した諸問題に関わらせながら、二、三私見を披瀝しておきたいと思えます。

まず第一に、社会学の「守備範囲」(領域)をめぐる議論についてであります。すでに明らかなように、この点では Wallace の図式(定式化)がもっとも広いものであります。その方法における positivism (→ biosociology) とあいまって、かれに対する批判や反論も多かろうと想像されます。それに加えて、かれの場合には、body と mind を繋ぐ〈積極的な〉理論展開がありませんから、広がった図式を統一する(原理)が問題になろうかと思うわけです。もちろん、説明変数間の関係は実証的データに基づいて〈帰納的〉にしか決まらない、とするのも一つの立場ではありましよう。

具体的にとりあげられている学説との関連でいえば、〈構造分析〉と〈社会心理学〉の両方を複眼的に(社会的)分析の視座の中にとり入れるべきだと考えているのは Zeitlin ですが、かれの場合には Marx がその両方に位置を占めていて〈繋ぎ〉の役割を果していることが分ります。

Alexander の中核的な理論的関心を Idealism vs. Materialism, Luhmann のそれを Elementalism vs.

Holism, と一応は規定しておきましたが、繰り返すまでもなくかれらの〈関心〉を必要以上に矮小化して捉えないように注意することが必要です。けれども、大局的にみれば、この二者には伝統的な社会学的視点(マクロ社会学)に対する関心の優位がみられるように思われるのです。Alexander は Marx-Durkheim, Weber, Parsons と論点を拡大してゆきますが、あくまでも〈構造〉(あるいは、構造化)への志向が強いと思われるし、Luhmann はなによりも、現代社会の全体的構造分析に大きな関心を表明しております。しかし、いずれにしても、〈方法論的個人主義〉の伝統は、そのイデオロギー的な〈強さ〉の点からみても、社会学的分析から完全に排除することは、きわめて難かしいのではないかという気がするのです。

第二に、〈方法〉としての Positivism と Antipositivism のことが気になります。Alexander は post-Positivism という局面として現代科学のあり方を規定するわけですが、相互に言及し合うこの同時代人たる二人の社会学者(すなわち、Wallace と Alexander) が、この点ではまったく鋭い対決の姿勢を示しているという事実をどのように理解したらよいのでしょうか。一方では、自然科学の場合ですら〈経験的 referent〉といっても人間の知覚・感覚能力をはるかに越える〈尺度〉(時間、空間、etc.) の世界では、こうしたことが成立するためにもある種の〈形而上学〉が求められるということがありましょうし、他方、にも拘らず、そういう〈形而上学〉自身がすでに人間の〈脳細胞〉(とその組織)の所産としてしか現実化することができない、という事実があるわけでありまして。一見どちらか一方から相手を完全に包摂してしまうような状況があるようにみえながら、その勝負の判定は、まったくもって困難であるというのが私の印象であります。

印象ついでにもう一つ、無責任なコメントをしておきますと、これまた〈困難〉の話になりますが、社会科学における〈知の性質〉、すなわちイデオロギー性の問題があるように思います。この場合の〈イデオロギー性〉とは、社会学の〈理論的論理〉を求める際に、その〈一般性〉を危くする原因となるところの〈制約〉の問題であります。

第一には、近代社会学そのものも持っている歴史的制約でありまして、これはこの学問そのものが(他の社会諸科学と同様に)、近代ブルジョワジーの〈自意識〉として確立したという点であります。そこには、Luhmann も鋭く感じとっていたように、〈古典的な個人主義・自由主義〉——あるいは、その後の展開におけるそれに対するアンチテーゼを含めて——というイデオロギーの汚染が不可避的に侵入しているということであ

す。

第二に、認識論的な制的についても配慮が必要です。夙に Beacon が Idola 論として述べているように、人間の認識には、生物学的(解剖学的)制約、人格的・学習的な制約(個人的体験などによるもの)、社会的制約(いわゆる、知識の存在被拘束性)、それに文化的制約(いわば、人間の思考の累積に由来するもの)など、多くの制約が存在していて〈完全なる真理〉への道を閉ざしているように思われます。特に、最近の科学・知識社会学の分野で問題となる点は、最後の文化的制約と深く結びついていると思われませんが、確かにわれわれは社会学のパラダイムに関しても、その〈流行り廃れ〉の早さに驚くばかりという状況を目の当りにしているわけであり

第三に、いつてみれば存在論的制約とでも呼ぶべきものがあります。行動生物学的な知見、すなわち、cognitive → evaluative → directive の〈情報変換過程〉として人間行動を捉える立場に立てば、人間の〈知〉の獲得行為を、その〈実践〉と切り離して論ずることはできません。〈知のための知〉というのは、特定の時代の特定の集団(例えば、大学における研究者集団)などの場合には当てはまっても、そうした集団の〈知の所産〉でさえ、早晚、その社会のより〈一般的な行為者〉(例えば、政府や大企業)の目標達成のために〈道具〉として利用される可能性は、ほぼ百パーセントと考えてもまちがいないでしょう。人間の〈知〉が、このような基本的特徴をもっている以上、〈制度〉としての科学(≒科学の規範)という意味を越えてこれを〈象牙の塔〉にとじ込めておくことは不可能であります。そこから、知識への〈社会的圧力〉が発動するわけでありましょう。

いずれにしろ、社会(的現実)をなんらかの仕方でも確立すること(理解・説明・定義すること)は、そこに住むすべての人びとの利害関心(状況)と大に関わることであります。方法論的仮定という、きわめて neutral な概念を前面に押し出すにしろ、Elementalism の援用は西欧型の個人主義イデオロギーとの親近性を否定し難く、その限りで、それが歴史的・政治的に一定の役割を果たしてきたことは明らかであります。このような大仰な事例ではなく、もっと単純な一つの現実認識を提供する場合でさえ、それによって、当該社会成員の利害状況を現状のまま維持すること、あるいはそれを変更することに、この〈認識〉(の提供)そのものが影響を与えることは必至であります。こうして、人間知(特に、人間が人間やその社会についてもつ知識)の本質に由来する事情のため、その純粋性(例えば、科学の規範によって統制された)を守ることの困難さはいくら強調しても強調し過ぎるということはないと思われ

社会学(すること)が〈行為〉であるという構造は、まさしく Luhmann のいう(自己テーマ化)、あるいはグールドナー的な意味での〈反省性〉(reflexiveness)ということでありましょうが、この点を確認する限り、われわれは〈方法〉に関する不断の〈自己反省〉(建設的懐疑)を日常的な社会学的営為の中に built-in する以外に、この問題を解決することはできないのではないかと思考するしだいです。

最後に、もう一度きわめて一般的なレベルで、社会学の theoretical logic を考える場合の無責任な思いつきを披瀝しておきたいと思います。それは、この essay の中心軸となっている二つの dichotomous な認識論的仮定をも含めて、こうしたアンチノミー克服に関する若干の示唆を最近の科学(主として、量子力学と遺伝子生物学を考えていますが)から汲みとることはできないかという問題です。

より具体的には、W. Heisenberg の『部分と全体』、それに J. Monod の『偶然と必然』の中の議論が手掛りになっていますが、いずれにしても、人間の〈科学的〉認識の〈論理〉(logic)は、歴史的にみても、いくつかの(すなわち、決して無限大的に多数ではないという意味)類型に整理できるように思われ、その限りでは、先進科学における論理と実証の諸結果(より確定的な論理の定式化)を後進科学へ導入することは科学の世界では常套手段ではなかったかと思われるのです。

さて、われわれのみてきたところでは、社会学における一般的な〈論理〉の探求がいくつかのアンチテーゼ(dichotomous axis)の〈統合〉と関連していることが分っています。私自身の二組の認識論的な仮定(軸)もそうですが、これを主題とした〈変奏曲〉がさまざまに形を変えてあちこちに出現していることもこれまで確認してきたところです。ここでは、この問題を科学一般の〈論理〉として考えてみるために〈部分と全体〉、および〈偶然と必然〉(自由と決定論)として定式化し、物理学と生物学におけるもっとも新しい知見を検討しながら、それが社会学理論にどのような形で貢献しうるかを示唆してみたいと思うのです。もっとも、一番最初に申しあげておかなければならない点は、この二つの定式化がまったく別々のものではないということで、これは社会学理論の場合にも Idealism vs. Materialism と Elementalism vs. Holism とが全然別個のものではなかったのと同じことです。すなわち、われわれの領域では、個人主体、行為という〈部分〉のレベルがより〈観念的なもの〉と結びつき、(それがまた人間の特異的な資質とも考えられたわけですが)その限りで自由の源泉であると考えられたのに対して、社会構造や集団という〈全体〉のレベルがより〈唯物的なもの〉(ものそのもの

に加えて制度というような物象化された「もの」をも含めて)と結びつき、社会秩序を可能とすると同時に、それが拘束や決定論の世界と考えられたわけであります。そして、positivistic な(換言すれば、法則定立的な)科学の立場で社会学的営為をおし進めようとするひとつとは「因果関係」(因果的説明)を旗印にこの後者の世界に注目したわけですし、逆に anti-positivist の立場を支持するひとつとは「意味関係」(解釈学的説明)を前面に押し出して前者の世界に中心的な関心を寄せたのであります。もちろん、社会現象を扱う場合、これらの異なる認識論上の立場が即イデオロギー的な立場と重ならざるをえなかったという事情はすでに論じておいた通りであります。

それでは、こうした〈論理〉の問題は自然科学の先進領域ではどのように展開していったのでしょうか。一例を量子力学にとれば、ここでは theoretical logic の確定にとって社会学の場合とは異なる三つの有利な条件が備わっているという点がまず留意されなければなりません。

社会科学(人間・社会現象を扱う)をやるものにとつてはいささか羨ましい話ですが、物理学の領域ではまず〈実験〉のメリットがあります。理論的に仮定される命題を実験によって確認するという作業は、もっとも実験技術との兼ねあいもありましたが、素粒子力学においても進行しておりました。そこで物理学者は確信をもって知見を蓄積することができましたし、その結果、より一般的な論理構成の展開が可能となったのであります。

その際、これは第二番目のメリットということになるのですが、数学的な形式(論理)を徹底的に利用することができたということがあります。もちろん、この背景には、一種のピタゴラス主義(広義には、プラトン主義と呼んでもいいのですが)、すなわち自然現象(物質世界)のもつ数学的形式に対する信仰とでも呼ぶべきものがあるようにも思えるのですが、いずれにしても、かれらは数学を使ってこれを記述し、また演算によってそのさまざまな可能的変化を予測することに成功したのであります(=解析性)。

そして最後に、これはやはり決定的なことですけれども、物理学者が到達したいかなる〈解釈〉に対しても物理世界そのものが反旗をひるがえすということとはなかったという点です。もちろん、素粒子の世界になるとそれはわれわれの直接的経験領域とはおよそ隔った世界であり、いわゆる「不確定性関係」も存在して、状況はそれほど明々白白というわけではありませんが、それにしても、少なくともここでは、社会科学的認識の場合のようないわゆる「イデオロギー的バイアス」の介入する余地はずっと小さいといつてよいと思うのです。

こうしたメリットのため、かれらは〈物理学の論理〉

をより普遍的な validity をもつ、洗練された形に発展させることができたわけですが、その場合の部分と全体に対する考え方は略々次のようなものでした。

Platon (の『ティマイオス』)の昔からひとびとが「物質の最も小さな部分」について考えていたことは、物理学では原子 (atom) の探求として展開するのですが、それが近年に至って陽子、電子、中性子からコォークへと進展し、(丁度光における波と粒子の性質を想起させるのですが) 結局、〈もの〉(存在)と〈エネルギー〉(作用)の両義性においてこれを概念化するという形で「量子」(quantum)という概念が導出されたわけであります。もちろん、物理世界のより複雑な現象を、質・量的にも(光子 photon の質量は定義上ゼロであります)寿命の点でもきわめて小さくまた短命であるこのような素粒子の特性に還元して説明することはできませんから、それはより小さなものが複合されてもっと大きな構造物となり、それが部分の性質に還元できない新しい創発特性 (emergent properties) によって特徴づけられることになるわけであります。こうした観念は、Heisenberg の場合、(部分ではなしに)「中心的な秩序」への信仰といってよいものと結びついており、部分 (的秩序) を全体 (的秩序) において解釈しなければならないというかれの哲学の基礎ともなったものであります。ついでに申しあげておけば、かれらの理論と実験の相互作用に関する重要なマキシムは、Einstein の言葉、「理論があってはじめて、それが何を観測できるかということを決めるのだ」というものだったということであります。もっとも Einstein 自身は「神はサイコロを振り給わず」と信じていたので、量子力学の新しい知見、不確定性の問題を単なる技術上の未熟としてしか認めようとはしませんでした。確かに、われわれの「外の世界」、すなわち「客観的時空間の中で確固とした法則にしたがって進行する物理過程」という描像が不可能となってしまった素粒子レベルでは、(主として数学形式を採用した)理論 (概念化) の導きが一層重要になったことは容易に想像されるのです。

他方、不確定性との関係で「統計的」(偶然性)という概念が物理学の領域で一般化することによって、化学や生物学との接近が可能となったことも事実で、これがいわば因果論的説明と目的論的説明の橋渡しの第一歩となったように思われます。そして、ここでは(実験的なものも含めて)、一定の現象を観測するための「観測状況」というものが決定的な重要性を帯びているということ。すなわち「観測状況」(実験装置とか観測手段)が異なれば観測結果も異なってこようというわけなのです。

量子力学と化学、生物学、さらには人間(意識)学との関係については、もちろん未だ不確定の部分が大き過ぎ

ぎます。しかし、最近のシステム論では、自然現象(そして人間意識でさえもがそのどこかの場所に位置を占めなければならないことは疑問の余地がないのですが)のシステムの階層構造の中で、部分と全体が相互に入り組んだ(重なり合った)構造をもっていること、換言すれば、ある現象は同時に部分であり全体であるという両側面をもち、部分としては高い自由度を、全体としては高い拘束度(秩序度)をもっていると考えられています(cf. E. Laszlo, 『システム哲学入門』紀伊国屋書店, 1980年)。

因果論と目的論の関係についての新しい知見は現代生物学、なかならず分子(遺伝子)生物学によってもたらされました。「地球上の生物の根本的特性は、遺伝情報の自己複製能力であり、合目的性はその結果であり、複製の間違いが進化の要因となっているという立場」に立って、生物のもつ〈合目的性〉の本体を暴露した Monod の場合、まず何よりも肝要な点は、生物の自己複製というような現象でさえ熱力学の第二法則(すなわち、エントロピー増大の法則)に抵触していないと考えています。そして、その機構の秘密を握っているのがタンパク質なのであります。いうまでもなく、地球上の一切の生命体は DNA 系遺伝子によって支配されているものとして一括して理解されるわけですし(タンパク質は 100~1 万個のアミノ酸残基を含んでいるのですが、バクテリアから人間に至る生物の中のアミノ酸の種類はわずかに 20 種、生物の巨視的構造の多様性が、実は微視的な単一性にもとづいているというわけです)、なかでも RNA が遺伝子暗号の翻訳機構の不可欠の要素であること、そのメカニズムについても例の DNA の二重らせん機構を Watson と Krick が分子構造の立場から解明したことは周知のところでありましょう。ここでも、微視的なサイバネティクス(分子レベル)のメカニズムの理解が生物有機体全体のあり方を理解するために不可欠であるという意味で、生物学が一種の〈全体論的〉仮定に立つという議論は完全に否定されています。同時に、こうした微視的レベルの研究によって、生物学的メカニズムの基本構造が追求されて「生物」というものの世界が解明されるというわけです。すなわち、きわめて正確な機械といってよい DNA 翻訳機に与えられる量子的な「乱れ」(擾乱)、あるいは偶発事(DNA 中のヌクレオチド配列のあるものが個々に変化する)が蓄積してマクロレベルにおける変化(進化)を可能にしているというのです。

こうして導出される結論は、合目的性というものが一つの「結果」でしかないということなのです。少なくとも、生物の進化に関する限り、遺伝的構造変化の唯一の貯蔵庫が今述べたような偶発的擾乱(それは完全に自由で、無志向的)でありますから、〈生物圏におけるすべ

での新奇なもの、すべての創造の源はただ単なる偶然だけによる)ということなのです。もっとも、だからといって淘汰の生起するレベルは生物有機体であって分子レベルではないのですから、こうして現れた(偶然)が全体性との両立という天秤にかけられて取捨選択されることとなります。

結論的にいえば、生物の特性を(不変性)(遺伝の問題)と(合目的性)(進化の問題)で述べることから出発するのですが、その論理(の中味)には上に示したように、偶然と選択の両側面が錯綜してみられます。ミクロレベルで、量子的擾乱(不確定性)を排除できないことから変化の可能性が生じますが、それはまたタンパク質以上の存在に観察される首尾一貫した、方向づけられた活動との秤定によって選択されるのです。しかし、高分子レベルのミクロサイバネティクス(例えば、≪アロステリック酵素≫)を含めて(そして、このような働きが可能であるのはタンパク質が他の分子をそれぞれの形で(認知)する能力——それはタンパク質のもつ≪立体的特異性≫によるわけですけれども——があるからだといわれています)、その合目的性の(原因)はまだ充分解明されていないように思われます。

ただ、このような現在の分子生物学的思考の背景にも、量子力学の場合と同様、素朴な経験主義が否定され、いってみれば可視的な対象の背後にある(形)(とその表象)への関心が支配的であるということです。そして、ときにはこうしたものへの接近は言葉を越えたもっと深いレベルで考える(=想像力)という主観的思考過程によっても媒介されるようであります。蛇足ついでに申し添えますと、Monodによれば、いわゆる価値と知識、倫理と知識の間に明確な区分を行なうことは不可能です。確かに、近代科学は「客観性の公準」の上に成り立ちました。(この点について、かれはキリスト教が(聖なるものの領域)と(世俗的なものの領域)との間の根本的区分を認めたことによって、科学が西欧世界で今日のような形で開花したのだらうと考えています。)だから、本質的に非客観的なものである倫理は永久に知識の領域から排除されてきたのです。しかし、このことがもたらした今日の(危機)については説明の要もありますまい。

さて、こうした議論をひとわり眺めてみて、(科学の論理)が今日現在奈辺にあるのか、またそれが(社会学の論理)にどのように貢献しうるのかという点を大急ぎでまとめておかなければなりません。

(個と全体)の問題に関しても、現象の階層性(個と全体がそれぞれのレベルで入れ替りながら構造化している様相)を認識しつつ、一事象の両義性(個性と全体性の両方を含むこと)を確認することが必要となります。自由と拘束の問題についても、ある程度まで自

然科学にみられた知見が当てはまるものと考えられます。Durkheimのいう(機械的連帯ではない)有機的連帯という秩序形式は、明らかにこうしたアイディアの概念化を包含していることは事実です。もちろん、極端な全体主義者(collectivists)が主張しているように、(そして、かれらはしばしば社会的集団生活を営む蜂や蟻を例にとりて、全体集団から引き離された個体の存続が不可能である点をひいてかれらの証明にしようとするのですが)、人間の社会生活の中で個体の独自の「意義」を完全に無視することは、いかに人間中心主義のイデオロギーがこれまでの社会観をゆがめてきたからといって、これに両手を上げて賛成するというわけにはまいりません。こうした極端な考え方は、人間の日常生活世界の一部がまぎれもなく「固有名詞の世界」であるという事実と真向から矛盾するからです。そこで、考えるべきは、個性や自由度を社会現象一般のレベルではなく、少なくともいくつかの層において定式化することの必要性です。その場合、可能性としては各層を通底する isomorphic structure (=究極的な原構造)を指定することが許されるかも知れません。もちろん、その根拠を人間の身体的・解剖学的特質(脳細胞組織のそれを含めて)に求めるかどうかは今のところ末だはっきりしないと申しあげなければなりません。

(物質と観念)の問題はこの最後の点と密接にからんでいます。ありていにいえば、未だ未知のことがらということになりましょう。ただ、これまでのところで明らかになった点は、人間(意識)もまた自然現象の一部としてその位置を与えられなければならないとしても、人間(意識)が人間(意識)を観察し、理解するということは、人間(意識)がその他の自然現象を考察することとは、なにか根本的に異ったことというべきではないのか、という点です。そうであれば、ここでは、認識との関わりで、先験、経験、体験の意味が大きく異ってくる可能性があります。psycho-somatic relationの研究はこうした問題の解決のための一つの手掛りかと思われるが、集合意識や集合表象としての世論、宗教的信仰、科学的知識の如き存在はどのように説明すべきなのでしょう。

想起すべき示唆が一つ存在します。それは、物理学でも生物学でも、今日、マクロ現象(宇宙や生態系)の探求は一見それとは無関係とさえ見えていたミクロ現象(素粒子や遺伝子のレベル)の解明を蓄積することで、その大作業が進行しているという事実です。徹底した分析的思考と考えられる最近の自然科学の成果です。徹底的に微視的な世界の解明からマクロ事象が説明されてゆくの。しかし、同時に、この発想は、(相対的ではあれ)そうした思考が意味をもつ一つの「全体状況」を

無視することができないという点です。そして、それが「相対的」である限り、そこに認識主体側の「操作」の問題が内在しています。Monod は、この点に触れて、Descarte と Kant の重要性（正しさ）がもう一度確認されたと述べているのです。

社会学がその theoretical logic を模索している中で、

上にみたような自然科学の知見がどのように生かしようのか、以上の考察は未だまったく原初的な域を出ないものですが、今後とも思索を重ねてこの問題に取り組んでゆきたいと思っている今日この頃です。

(1984年8月26日)